

## 月の花挽歌 ～7. 時の過ぎ行くままに～

### 7-4

女から別れの言葉を言われた経験値のない横田は、想定内のはずであったにもかかわらず、いざ直面してみると時間が止まってしまっているような気がしていた。

人一倍自尊心の高い男の根底が揺れ動いていた。

今日は確か、12月8日の金曜日。昼間に少し雨が降ったけれど、すぐに止んでいたはずだと、横田は現状とは無関係なことを連想することで瓦解しそうになる自分を、どうにか支えていた。

気持ちが意識のエアポケットに落下してゆくと、真紀は時と場所さえ置き忘れて、男に引導を渡していた。まもなく引き潮のごとく足早に空白が埋められてゆくと、真紀の眼前に蒼白な顔の横田がフェードインした。

「改めてご連絡させていただきますので、今日のところはお帰りになってください」と真紀はつとめて穏やかに言った。

「見くびるな！」と横田は押し殺した声で言うが早いカクテルの残りを、真紀の顔を目掛けて振りかけた。

カクテルのわずかな残量は、真紀の唇と着物の衿合わせにかかった。

真紀は咄嗟の出来事に怯んだけれど、痴話喧嘩ごときで、『こはる』の名に泥を塗るような茶番だけは避けなければと言う強い思いが脳裏をよぎったので、「私が悪うございました。お詫びと言うのもなんですが、お店からシャンパンをサービスさせていただきます」と袂から取り出したハンカチで口元を押えながら詫び言を述べた。

「すまなかった。悪いのは私の方だから、気持ちだけ受け取らせて……」と恥じ入る気持ちにかられた横田は語尾をにごらせた。

二人の席の近くにいた客やホステスは、妙な気配を感じていたが、飲み物を振りかけた場面を見てしまったのは、ヒデコともう一人のホステスだけだった。

他の席に移った時から、嫌な予感がしていたせいもあって、接客しいしい垣間見えていた視線の先で、凶らずも衝撃的な事象を目撃してしまったヒデコは、同席のお客に疑念を抱かせるのを覚悟で、即座に左手を挙げて黒服を呼んだ。

ヒデコに耳打ちされた黒服は、すばやく真紀の席に動いた。

事が治まりかけているときに黒服がやってきて、真紀に暗黙の指示を仰ぐので、黒服の気持ちを察した真紀は横田に悟られないように何食わぬ顔で、「シャンパンをお願いします」と黒服に頼んだ。